

# ケネディーの死・あのとき（遺稿）

（2011年4月逝去）

ガネフォ水球

菅 久 尚 武（生誕 82 年）

（中央大学出身）

この遺稿は1996年（平成8年）7月に書かれたものです。

1963年11月22日、私はインドネシアの首都ジャカルタにいた。

『ケネディーが死んだ』日本大使館から連絡があった。

2年後にスカルノが失脚した一連のインドネシア共産党によるクーデター前夜のジャカルタは、騒然としており、肌に突刺さる緊張感があった。情報がコントロールされており、国外の動向は全く判らない。日本大使館が唯一、ニュースの窓口であった。街中の民家は簡易な掘っ建て小屋の密集住宅で、道の両側に点在している。街燈がなく、夜ともなれば暗闇と素足の無表情な人々がうごめく、ムットとする空気の淀みと漆黒の恐れ気を秘めた街が、当時のジャカルタであった。

私達が入国する数週間前、イギリス大使館が焼打ちにあい、その残骸をさらしており、何かあるのではと、一層恐怖心を煽られた。この時代は、革新的な第三世界と言われる国際勢力があった。アメリカ、イギリス、フランスと言った資本大国が、世界を動かすことは、まかりならぬと、国家よりも個性的な政治家が、呉越同舟、大同団結した。インドネシアのスカルノ、中国の毛沢東、インドのネール、エジプトのナセル、カンボジアのシアヌーク、と言った政治家達であり、バンドン会議がその精神的イデオロギーとなった。既成世界と異なるアジア・アフリカの連帯世界を造ろうと行動し、その強面な政策は、ことごとく国際紛争の火種となった。スポーツにおいてもしかり。

オリンピックに対抗して別にオリンピック（新興国スポーツ大会）を開催すると宣言した。東京オリンピック開催1年半前のことである。オリンピック第1次候補選手であった私の所属する東京クラブに慶大OBから重大な話があると招集がかかり新宿のアサヒビアホールにクラブの有力選手全員が集まった。

唯一、中国との公式窓口であった日中友好協会が、ある人を通して、インドネシアで開催される第1回新興国スポーツ大会に日本から選手団を送れないかと打診して来た。当時の日本は、戦後の賠償を含め、インドネシアとは経済的にも非常に深い関係にあり、インドネシア共産党を支援している中国にとって実に巧妙な外交折衝を考えたものである。日本が選手団を送らなければ、第3世界は、オリンピック参加をボイコットするぞと、おどしているのである。中国がスカルノ

のメンツを立てる一方、インドネシア共産党の勢力を伸ばす考えがはっきりとみてとれた。

大変な話である。頑迷なアマチュアリズムで固まる、日本のスポーツ組織に政治とスポーツが交錯した話を持ち込めるものではない。戦後日本の柱として名実共に世界の仲間入りをと国家の悲願である東京オリンピックを、もし30数ヶ国がボイコットすれば開催もあつたものではない。

何故、慶応大学関係者に中国が、と考えられるが、実に中国的事由によるものであつた。孫文が日本亡命中、大東亜共栄圏を唱えた頭山満がその保護者であつたことは有名だが、その孫の頭山立國氏（慶大卒アジア青年同盟）にまとめ役を依頼してきたのである。

若かつた。情熱があつた。血が騒ぐ。捨石になり懸橋となろうと全員が思つた。国家の危機に青年が立向かう幕末の志士になつた気持であつたように記憶する。

東京クラブは、中日慶成法の各大学のOBで結成された国内最強の水球チームであつた。オリンピック選手12名は全員、このクラブから選ばれることになつていて、クラブ独自で選考会を持ち、新興国スポーツ大会参加12名を決定した。この12名は総てを捨てなければならない。残つた者は東京オリンピックを成功させる側となつたのである。

IOC未加盟国と試合をした場合、その参加国の各連盟又は参加選手は除名となる規約があつた。（中国はIOC未加盟）私達12名の行動はオリンピックを成功させる為であつて所属連盟を窮地に追込もうとするものではない。潔く日本体育協会、日本水泳連盟に脱退届を提出した。この日から反乱軍となつた。

このあたりからは、当時新聞紙上、連日取上げられたのでご記憶の方もおありと思う。

中心的に活動した水泳選手に、日本体育協会はアマチュア資格剥奪、日本水泳連盟からは永久除名となる。予想はしていたが大変なショックであつた。詳しく当時の真相を書くのは初めてである。

米国や南米の邦人の方々から檄文が何通か届き感激した。本当にうれしかつた。100名13競技の選手団のキャプテンに私になり、ガルーダ航空DC6をチャーター。支援者のあふれんばかりの日の丸の旗の中、羽田空港を出発した。レスリング協会の八田会長が『ありがとう』と、おっしゃり「堂々として行ってこい」と、反乱軍を見送って下さつた。

この時代年間海外渡航者2,000人程度と記憶する。何故かアメリカ大使館で渡航審査を受けた。私の前が女優の朝丘雪路さんと親しく話をした。朝丘さんはケネディーの死をアメリカで体験したと、最近テレビで話しているのを観た。さて、私たちの搭乗した4発プロペラ機は、まずサイゴンで給油することになつて

いたが、着陸しない。1時間も飛んでいたが、結局フィリピンのマニラに降りた。アメリカの後押しで、南ベトナムのゴ・ジン・ジェム政権がクーデターで倒され、泥沼のベトナム戦争の幕開けの歴史的な日、私達はサイゴン上空をグルグル飛んでいたことになる。20時間近くかかり真夜中の2時頃、ジャカルタ空港にやっと着いた。タラップの脚元からターミナル入口まで、赤い絨毯が一直線に敷かれており、その両側にリッパな人達と大変美しい民族衣装を着た女性達がニコやかに迎えてくれ、全員、レイを掛けてもらった。空港を一步出ると”ワーン”と言う地鳴りのような歓声と、一万人近いインドネシア民衆に迎えられた。ヒドップ、ジャパン（日本万歳）。

海外では私たち日本選手団が大変な思いをして参加したことが良く知られており、熱狂的歓迎を受けることになった。（オリンピック開催を配慮して個人資格で参加したが、地元では日本代表としてあつかわれる）

古内駐インドネシア大使が涙を流し、君達が来てくれなければ、在インドネシア邦人は大変なことになったと心から喜んで頂いた。以後再三に亘り大使館でレセプションを催して頂き、試合中はオニギリの差入れまでして頂いた。

また、戦後現地に残った旧日本軍兵士とその家族の方からは、やっと日本人として誇れると、帰国するまで連日宿舎を訪問され、英雄扱いされ・面映い日々であった。

中国共産党が世界中にその思想を輸出した時代である。インドネシアは民族独立の父、スカルノが統治していたが、軍部とインドネシア共産党のバランスの上にスカルノの政権があり、非常に不安定な情勢にあった。勢力を伸ばす共産党に対し、軍部はスハルトを中心に市中に最強のパラシュート部隊と戦車でガードしていた。この大会に中国はインドネシア共産党を強力に支援するため、500名の大選手団と不遜と受けとられていた秘密工作員を多数送り込んできた。今では考えられないエピソードがあった。大観衆の前で、前夜祭が催され、各国代表が歌を披露することになった。歌音痴の私達が選んだ歌が『支那の夜』であった。古川君がリーダーとなり、歌い始めるやいなや、中国の工作員2名が目を吊り上げ、血相を変えて飛んで来た。私の胸ぐらを掴みワーワーとなる。超満員の会場は一瞬水を打ったように静まりかえった。

両国の通訳が間に入り、工作員が言っていることは、中国『貴国は支那と言う、日帝時代の地名をあげ、我が国を侮辱した。よって正式に陳謝せよ。』日本『我々は、歌の詩の中にある支那と言う幻の国を歌った』『ペチペチ、ガーガー』『この共産党の馬鹿野郎ヤルカーッ』となった。その時ワキ腹に何か冷やりと痛みを感じる。いつの間にかインドネシア兵士4、5名が、私と中国共産党野郎を銃剣で突いている。（銃剣の先は丸い）インドネシアの将軍が中に入って、両者は引下がった。私達は2度、支那の夜を歌ってやった。聴衆も大喝采、

痛快であった。56ヶ国、4千名の国と選手が参加、大会は開催された。私達の試合は8チーム中、堂々の2位。オリンピックに負けないリッチな銀メダルを、スカルノ大統領から頂いた。スカルノは私より色が白かった。

試合では、アルジェリア戦を思い出す。選手の多くはフランスとの独立戦争歴戦のゲリラ兵で、身体中生々しい傷痕があり、アラブの盗賊のような面がまえである。彼等の特技は噛みつくことであった。今も30数年前の歯形が残っている者もいる。



『ケネディー大統領が死んだ』歴史に残る日、私は自分なりの歴史を残すために奮戦中であった。ベトナムのクーデター、中国の文化大革命が起る直前の姿、クーデター前夜のインドネシアと重なり、ニュースが伝わらないことと合わせ、世界で何か大変なことが起るのではと、真剣に論議したことが思い出される。

1964年、東京オリンピックが最大規模で開催された。一人、テレビを観ながら良かったと思うと共に、ささやかな満足感で島根出身の福井君（水泳選手）が旗手をつとめる日本選手団に拍手を送った。

歴史は流れ日中の国交が正常化され、国際社会に復帰した中国（恩義を大切に）が、私達のアマチュア復帰を日本政府に働きかけ、連盟が朝日新聞に復帰決定を発表した。

修道高からは9回卒の古川康之君（修道一中央大学）が終始私と行動を共にしてくれた。

「あのとき」以来、インドネシアは身近な国となった。

岡部英幸君所有のビルで「ジェンバタン・メラ」…赤い橋…という、インドネシアレストランを一昨年アジアオリンピック（アジアオリンピックとは、1994年（平成6年）10月 広島で開催された第12回アジア競技大会の事です。）に合わせ開店。

レセプションにインドネシア選手団がガルーダのエンブレム持参で出席祝ってくれた。大会中大使主催のパーティーもお引き受けした。コックにはバリ島出身の青年がいる。インドネシア美人も働いている。

私にとって「あのとき」は今も生き続けているのである。